

## ホームステイの英語力への効果 (I)

### The Effect of Homestay Experience in the United States on the Participants' English Proficiency (I)

(1989年4月7日受理)

上斗 晶代 沼本 健二  
Akiyo Joto Kenji Numoto

**Key words:** ホームステイ homestay, 英語教育 English education, 英語力 English proficiency / competence

#### Abstract

The purpose of this investigation was to determine 1) whether or not junior college students' English improves after their homestay trip to the U.S., 2) which of the five sections improves most: listening comprehension, the knowledge of conversational expressions, writing, grammar or reading, 3) whether there are any differences between the English competence of homestay students and that of non-homestay students, and 4) the relationship between the results of the English proficiency tests and those of the questionnaire test. The English proficiency tests and the questionnaire test were carried out toward that end.

The same English proficiency tests were given before and after the homestay trip to 142 subjects taken from the English majors of this junior college including 32 homestay-experience students. After the trip, the 32 participants were asked to answer a questionnaire with 23 question items concerning self-estimation of their English ability and their attitude toward learning English.

It was found that (1) the English ability of the homestay students tended to be more improved than that of non-homestay students, (2) out of the five sections of the English proficiency test, bigger improvement was found in listening comprehension and the knowledge of conversational expressions after the trip in the homestay student group, (3) the homestay students themselves also judged their ability in those two sections to have improved after the trip, and that (4) the student attitude toward learning English became more enthusiastic and positive after the homestay trip.

#### 0. はじめに

国際化時代といわれる近年, 日本の中学生から大学生を対象とした, 英語圏への短期ホームステイ旅行(語学研修旅行)が盛んである。参加した学生たちは, 1か月たらずの短期間に, 語学的にも文化的にもさまざまな体験をし, 意識の有無にかかわらず, 日本では得られなかったであろう有形無形の影響を受けているのではないかと思われる。しかし, このような語学研修を目的としたホームステイ旅行が, 参加者の英語力にどのような影響や効果をもたらすかを論じたものはあまりないようである。<sup>1)</sup>

そこで本稿では, 本学の学生を対象に, 昨年(昭和63年)夏に実施したアメリカ英語研修旅行の参加

学生の英語力への効果について調査した結果を報告する。なお、本稿は、同じテーマのもとにこれから毎年、何年かにわたって行う研究プロジェクトのパイロットスタディである。

## 1. 目 的

本稿では、以下の4項目について調べる。

- 1) 渡米前と帰国後では、ホームステイ参加者 (HSG) の英語力に変化がみられるかどうか。
- 2) 変化がみられるとすれば、どの分野にどの程度の変化がみられるか。
- 3) これらの変化は、ホームステイに参加しなかった学生 (N-HSG) と比べてどうか。
- 4) HSG に対して帰国後実施した、英語力自己評価および英語学習意欲に関するアンケート調査の結果と英語力テストの結果との関係。

## 2. 方 法

### A) 英語力テスト

以下の要領で、英語力テストを渡米前と帰国後の2回実施し、HSG と N-HSG における渡米前と帰国後の英語力の変化について調べた。

1) 対象：本学英語英文科学生142名 (1学年85名, 2学年57名)。このうち、32名 (1学年24名, 2学年8名) は昨年夏、本学企画の第5回アメリカ英語研修旅行に参加した学生である。

2) 実施時期：第1回・昭和63年7月上旬 (出発の約2週間前)

第2回・昭和63年9月中旬 (帰国して約1か月後)

3) テスト内容：実用英語技能検定「出題分析と対策」問題 (2級, 3級), 国連英語検定問題 (B級, C級), および大学・短大用英語聴解力テキストより、聴解力, 会話表現の知識, 語法・作文, 語法・文法, 読解力の各分野ごとに、問題を選択して作成した。全テスト項目数は106で、各分野の内訳は、聴解力26項目, 会話表現の知識20項目, 語法・作文20項目, 語法・文法20項目, 読解力20項目である。所用時間75分で実施した。また、第1回, 第2回とも同じ内容のテストを実施した。

このテストとは別に、大学英語教育学会 (JACET) の作成による英語聴解力標準テストを、本学英語英文科学生140名 (内32名が HSG) を対象に、昨年5月中旬と11月下旬の2回行った。

### B) アンケート

以下の要領で、帰国後、研修旅行参加者に対して英語学習意欲および英語力の自己評価に関するアンケート調査を行った。

1) 対象：第5回アメリカ英語研修旅行に参加した学生35名 (分析対象は英語力テストを受験した32名)

2) 実施時期：平成元年2月下旬 (帰国後約6か月)

3) 内容：参加した動機, 研修旅行前と後の英語力の自己評価および学習時間とその方法, アメリカ滞在中の英語力の自己評価と学習態度, 帰国後の英語学習意欲の変化, 等々について計23項目

## 3. 第5回アメリカ英語研修旅行の内容

昨年夏行われた本学企画の第5回アメリカ英語研修旅行のプログラムの内容は以下の通りである。参加した学生は全員、すべての旅程を終えて帰国した。

この研修旅行は、英語英文科の専門科目（選択）としてカリキュラムに取り入れられており、4月より出発までの約3か月間、週1回の事前指導を行った。事前指導については次項に記すことにする。参加する学生は、アメリカの社会、文化、言語、生活などについて、旅行期間中に体験したことや調べたことをもとにレポートを作成することになっており、各自出発前に決めたテーマをもって旅行に臨み、帰国後、日本語によるレポートを提出した。

1) 実施期間：昭和63年7月17日より8月13日までの4週間。7月17日より8月7日までの約3週間ホームステイし、残りの期間はロサンゼルス、ハワイを観光旅行した。

2) 参加者：本学英語英文科学学生35名（内3名はテスト未受験）、および引率教員2名。

3) 研修地：カリフォルニア州サンノゼ市およびサラトガ市

4) 研修内容：参加者は各家庭に一人ずつ滞在した。ホームステイ期間中は、3回の終日フィールドトリップと週末を除いて、毎日英語の授業が行われた。授業はサラトガ市にあるウエストバリーカレッジの施設を使用して行われ、担当教師はCHI（Cultural Homestay Institute）所属のティーチャーコーディネーター（T/C）と呼ばれる3人の米人女性であった。授業は午前あるいは午後の半日の場合がほとんどであった。学生は3クラスに分れ、1クラスを一人のT/Cが担当した。

主な授業内容としては、a) 発音の練習、b) 英語の歌や語学的なゲーム、c) 日常生活に必要な表現の説明と練習（お金の使い方と買い物をする時の表現、郵便局で必要な表現など）、d) ストーリーの内容把握（聞き取り）、e) イディオムの説明、f) サンフランシスコへの観光旅行やアメリカについての感想文を書くこと、g) CHIが編集したテキスト中のreading passageについての問いに文章で解答すること、h) 日常の出来事や日米の教育、文化に関する質問への口頭での応答、i) ウェストバリーカレッジの教授によるアメリカおよびホームステイした地域の生活、文化に関する講義（3回）、等々である。

#### 4. 事前指導について

参加する学生に対し、出発までの約3か月間、週1回の事前指導を行った。これには、4回の旅行会社による渡航準備についての説明が含まれている。事前指導の主な内容として、a) アメリカの生活についてのビデオ教材（“Living Abroad”）を提示し、この中から日常生活や観光旅行に必要なと思われる表現を指摘、説明、b) 日本や日本独特のもの（ゆかた、着物、扇子など）、日本料理法、自分が住んでいる町について英語で説明文を書かせること、c) 日常会話表現や日本、岡山、広島についての英語説明のプリント配布、d) アメリカでのパーティーで披露する出し物（盆踊り、華道、茶道、習字、そろばん等々）の練習と英語説明、等々である。

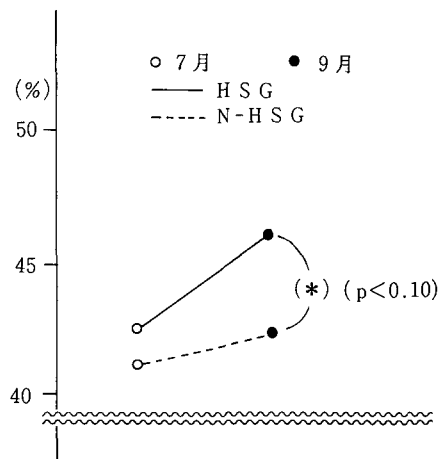


図1 英語力テスト総合得点率の平均とt検定結果

#### 5. 英語力テストの結果と考察

2回の英語テストにおけるグループ別の総合得点率の平均とt検定の結果を図1および資料1の表1に示した。

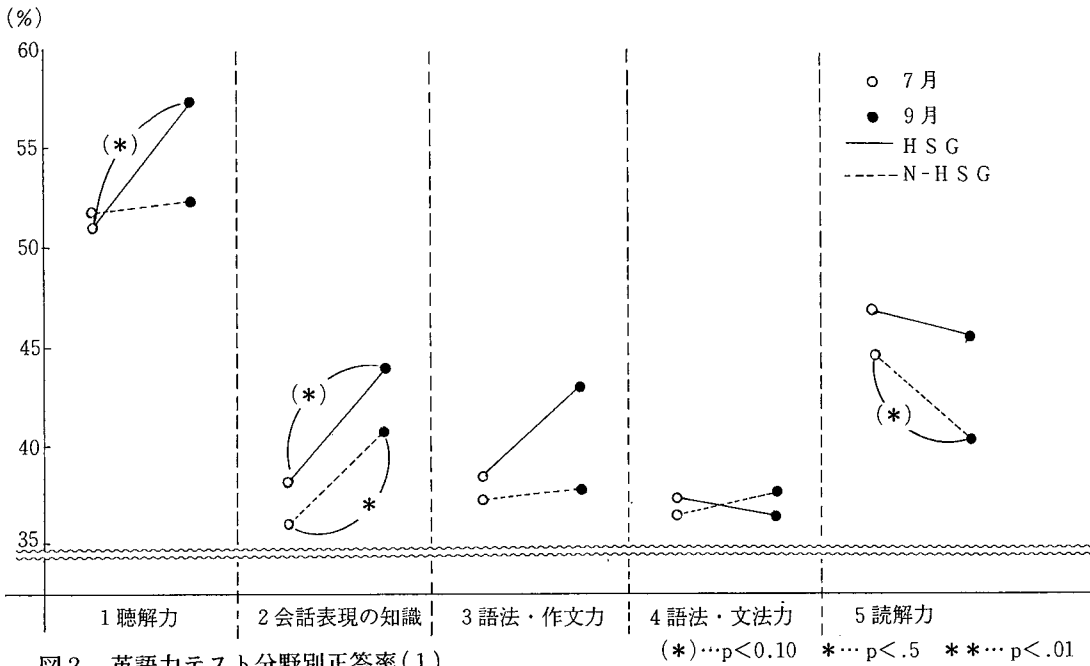


図2 英語力テスト分野別正答率(1)

総合得点率をみると(図1), 第1回のテストではHSGとN-HSGとの間には, 有意な差がみられないが, 帰国後の第2回のテストでは, HSGの得点の方が大きく上昇し, N-HSGよりも得点が高い傾向にある( $p < .10$ )。HSGの第1回と第2回のテストの間に有意差はみられないので, HSGの英語力がホームステイ後に飛躍的に向上したとは必ずしもいえないが, N-HSGと比較すると, ホームステイの英語力向上への効果はあったといえよう。

テスト結果を分野別にみると, 以下のことがいえる。

図2および資料1-表1より, 実施したテストの5分野のうち, HSGで得点の上昇が最も大きかったのは, 聴解力である。次いで会話表現の知識, 語法・作文力の順に得点の上昇が大きくなっている。一方, 語法・文法力と読解力は, HSGにおいて低下している。以下に, 各分野についてより詳しい検討を試みる。各分野を問題別に下位区分したものを, 図3及び資料1-表2に示す。

### 1) 聴解力

図2にみられるように, 聴解力においては, 第1回と第2回のテストの間には, N-HSGでは有意差がみられないが, HSGでは10%の水準で傾向差がみられ, ホームステイ後に聞き取りの力が伸びていることがわかる。

聴解力の分野は, テスト内容によって2つ(A, B)に分けられる。(A)は, 2人の会話を聞き取る問題で, 内容真偽, 内容に関する問いに選択肢より選んで答えるもの, 出来事を年代順に並べるものから成っている。(B)は, 物語文を聞き取り, 内容に関する問いに選択肢より選んで解答するものである。

図3より, どちらにおいても, HSGの方が得点の上昇は大きい, 会話の聞き取りよりも, 物語文の聞き取りの方が有意に向上している( $t = 2.21, p < 0.05, df = 62$ )。またN-HSGとの間には10%水準の傾向差がみられ, HSGの正答率が高い傾向にあることがわかる。これは, アメリカでの授業で物

語を聞き取ることを何回か行っているためとも考えられる。また、問題数が5問と少なく、平易であったことも関係しているかもしれない。

会話の聞き取りでは、ホームステイ前はHSGの方が得点が低かったのが、ホームステイ後はHSGの方がかなり高くなっていることに注目したい。ホームステイ経験によって、渡米前よりは会話の聞き取りに対する困難の度合いが軽減されたとみることができるのではないだろうか。

このテストとは別に実施した大学英語教育学会 (JACET) の作成による英語聴解力標準テストの結果をみると (資料1-表3), 5月と11月のテストを比較すると、N-HSGは10%の水準の傾向差がみられるに留まっているが、HSGは5%の水準で有意に向上しており、HSGの聞き取りの力の方が伸びていることがわかる。また、両グループの正答率の間には、5月のテストでは有意差がみられないが、11月のテストでは5%の水準で有意差が生じていることがわかる。

JACETの聴解力テストの結果においても、HSGの聞き取りの力がホームステイ後に向上しており、聴解力へのホームステイの効果があったと考えることができよう。中・高生を対象としたホームステイにおいても、聞き取りの力がついた者が多かったという報告がある (渡辺, 1979)<sup>2)</sup>。

## 2) 会話表現の知識

図2より、会話表現の知識においては、2回のテスト間に、HSGでは10%の、N-HSGでは5%の有意水準で、両グループとも向上がみられる。帰国前・後のテストで、両グループ間に有意差はみられないが、HSGの方が2回とも高得点である。

この分野は内容によって3つ (C, D, E) に分けられる。3つとも平易な英文に対する応答文を選択肢より選ぶ問題で、(C)は、発話された英文を聞いて、その応答文を選ぶもの、あとの2つは、書かれた英文に対する応答文を選ぶ問題であるが、(E)では、応答として適切でない文を選ぶことになっている。

その結果、(C)では、HSGにおける2回のテスト間には有意な差がみられないが、N-HSGでは5%水準で有意差がみられる (図3)。N-HSGの方が有意に向上したといえるが、2回目のテストにおける両グループ間には有意な差はない。

(D)では、2回のテスト間に、HSGは10%水準の傾向差がみられるに留まっているが、N-HSGは1%の水準で有意差がみられることより、N-HSGの方が有意に向上しているといえる。2回のテストとも両グループ間に有意な差はないが、ホームステイ前はHSGの正答率の方が低かったが、ホームステイ後はHSGの方が高くなっていることに注目したい。

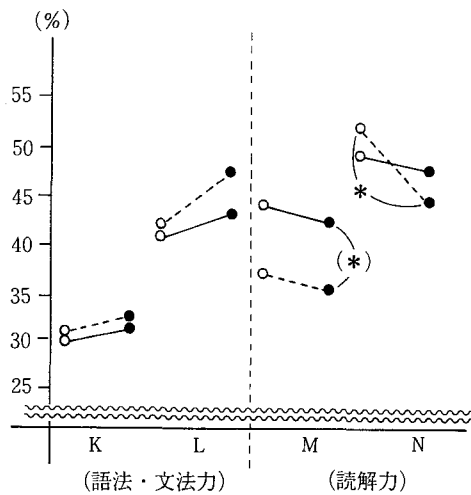
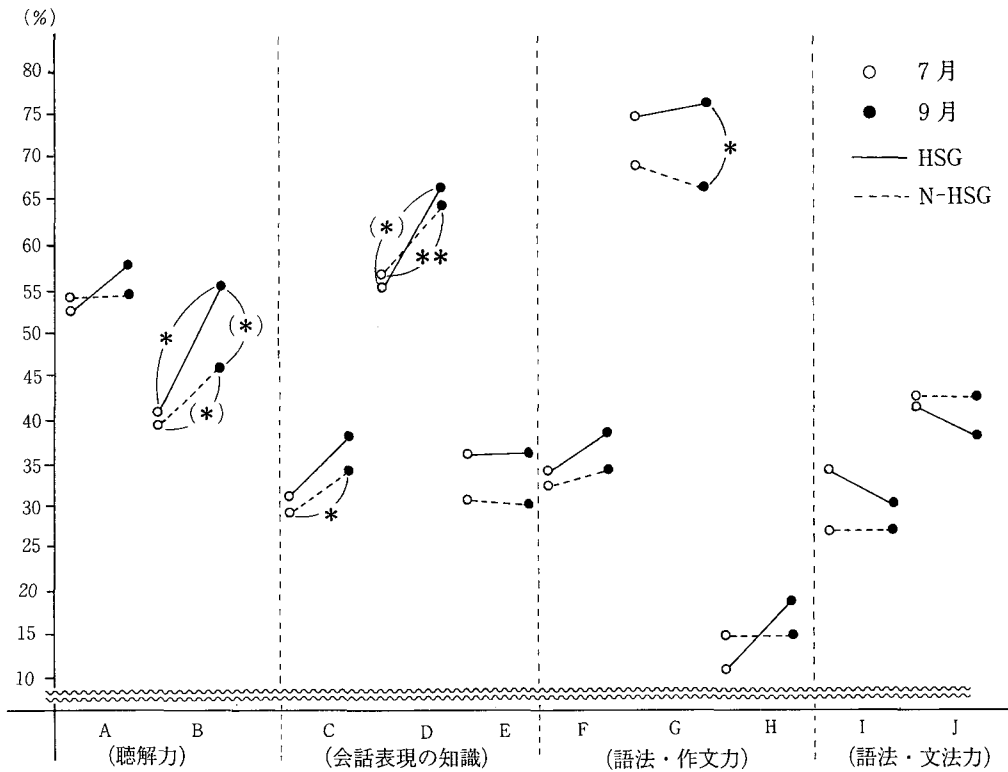
(E)については、HSGの得点のホームステイ後の変化はないが、N-HSGではわずかながら低下している。HSGの方が高得点であるが、両グループ間に有意差はない。(E)において全体的な向上がみられなかったのは、この問題が、適切でないものを選ばせるという、受験者を惑わせやすい性質をもつためと解釈できるかもしれない。

会話表現の知識において、今回のテストでは、期待していたほどのホームステイ効果はみられなかった。アメリカでの授業内容として、場面設定による会話練習はあったが、さまざまな英文に対する応答表現の説明や練習はなかったようである。このようなことも関係しているであろう。

## 3) 語法・作文力

図2より、語法・作文力においては、2回のテスト間および両グループ間には有意な差はみられないが、N-HSGでは第2回のテスト結果にほとんど変化がないのに対し、HSGでは4.5ポイントの上昇がみ

ホームステイの英語力への効果 (I)



(\*)... p < .10 \*... p < .05 \*\*... p < .01

図3 英語力テスト分野別正答率(2)

では、ホームステイ前にはHSGの得点の方が低かったが、ホームステイ後には、ほとんど変化がなかったN-HSGを上回っている。

(G)においては、第1回のテストでは両グループ間に有意差はみられなかったが、2回目のテストでは両グループ間に5%の水準で有意差が生じている。これは、第2回のテストでHSGの正答率は上

られる。HSGのこの分野における英語力がN-HSGに比べて、有意ではないが向上したといえる。

この分野もテスト内容によって3つ(F, G, H)に分けられる。(F)は与えられた日本文に一致するよう英文中の空所に1語記入する問題である。ほとんどが前置詞や助動詞を書き込むようになっており、語法の知識をみる問題といえる。(G)と(H)はともに日本文を参考にして、英単語を並べ変えて英文を作る整序形式の問題である。ただし(H)においては、与えられた英単語中に不要なものが1つ含まれている。図3にみられるように、(F), (H)においては、2回のテストにおける両グループ間にも、2回のテスト間にも有意差はみられなかった。しかしどちらの問題においても、HSGの方が正答率の上昇の度合いが大きい。また(H)

昇したが、N-HSG の正答率が低下したためと考えられる。7月のテストで高得点であった (G) がさらに上昇して有意差が出たということは、ホームステイの効果が働いたといえるのではないだろうか。

語法・作文の分野では、(F) の語法問題よりも (G), (H) の整序形式の問題において、より大きいホームステイの効果があらわれていると考えられる。これは、アメリカでの授業で作文の活動はあったが、語法は授業内容として特になかったということも関係していると思われる。

#### 4) 語法・文法力

図2より、語法・文法力においては、2回のテストとも両グループ間に有意差はみられないが、N-HSGでは向上しているのに対して、HSGでは低下している。またホームステイ前のHSGの正答率はN-HSGよりもわずかに高いが、ホームステイ後はN-HSGよりも低くなっている。どちらのグループにおいても、2回のテスト間の有意差はないので、この分野の英語力におけるホームステイ前後の変化はあまりなかったといえる。

この分野は4つに下位区分 (I, J, K, L) される。(I) と (J) は、英文中のいくつかの下線を引いた部分から文法的誤りを含んだものを選ぶ問題であるが、参考となる日本文が (J) にはあり、(I) にはない。(K) は、1組となった3つの短い英文の中より、語法上の誤りを含むものを1つ選ぶ問題である。(L) は、短い英文中の1空所に、語法・文法上適切な語あるいは句を選択肢より選んで答える問題である。

図3に示すように、(I) から (L) までのどの区分においても、両グループ間およびそれぞれのグループにおける2回のテスト間には有意な差はみられなかった。ただし、(K), (L) においては両グループとも正答率が上昇しているが、(J) においては両グループとも低下し、(I) においてはN-HSGは変化がないのに対し、HSGでは低下している。また2回のテストとも (I), (K) においてはHSGの方が得点が高いが、(J), (L) においてはHSGの方が低くなっている。アメリカでの授業内容に文法の説明や練習がほとんど皆無であったことが関係しているかどうかはわからない。

#### 5) 読解力

図2でわかるように、読解力においては、両グループとも低下している。N-HSGでは2回のテスト間に10%の水準で傾向差がみられるが、HSGでは有意な差はなく、低下率はHSGの方が小さい。

この分野は2つに下位区分 (M, N) される。ともに長文読解であるが、(M) は、長文に関する短い英文中の10の空所に入る語句を選択肢より選ぶもので、(N) は内容真偽の問題であるが、内容に関する10の英文より5つのみ正しいものを選ぶという指示があり、6つ以上選んだ場合は無効となる。

図3に示すように、(M) においては、第2回のテストで両グループとも正答率が低下しているが、両グループ間に傾向差がみられる ( $p < .10$ )。ホームステイ後では、HSGの得点が高い傾向にあるといえる。

(N) においても、第2回のテストで両グループとも正答率が低下しているが、2回目のテストではN-HSGが5%の水準で有意に低下している。このため、第1回のテストではHSGの正答率の方が低かったが、2回目ではN-HSGの方が低くなっている。

読解力が2回目のテストで低下した原因には、問題の難易度や性格、時間配分の問題などさまざまな要因があげられようが、HSGにおける低下率がN-HSGよりも小さかったのは、アメリカでの英語研修で毎日英語に接していたことの影響があると思われる。なおアメリカでは、授業中での長文読解の練習はなく、宿題として、CHI編集のテキスト中の英文を読み、内容に関する質問に文章で答える作業をと

きどき与えられている。

## 6. アンケート結果と英語力テスト結果との関係

ホームステイ参加者の英語力の自己評価、および英語学習意欲についてのアンケート結果を以下にまとめる。なおアンケート調査の結果は、本稿で必要とする項目のみを資料2に示した。

A：英語力の自己評価について

### 1) 聞く力

聞く力については、アメリカに行く前は、半数以上の学生が多少とも自信があったようである(資料2-1)。しかしアメリカに行ってからは、非常に困難、あるいはかなり困難を感じた人が24名で、4人のうち3人が聞き取りに苦勞したということになる。日本で学ぶ英語とアメリカで実際に話される英語との違いがこの主な原因としてあげられよう。

聞く力は、アメリカに行って、最初自信が持てなかったが(資料2-4)、14名はホームステイ中にだんだんと自信が持てるようになったと回答しており、帰国後全員が、聞く力が向上すると思うと回答している(資料2-8)。これらの聴解力に関する学生の自己評価のアンケート結果はテストの結果と一致しており、テストにおいても、聞き取りの力はホームステイ前と比べて向上する傾向にあることが、前項の考察で明らかになっている。聴解力の向上については、アメリカでの実体験のみならず、資料2-2にみられるように、アメリカへ行く前に過半数の学生が聞き取りに力を入れて勉強したこととも関係しているのではないだろうか。

### 2) 話す力

話す力については、ホームステイ前もホームステイ最初の頃も、大半の学生が自信がなかったようであるが(資料2-1, 4)、13名(約40%)がホームステイ中にだんだんと自信が持てるようになり(資料2-4)、ホームステイ後、大半の学生が話す力が向上したと回答している(資料2-8)。このことは、資料2-5にみられるように、多くの学生がホストファミリーと積極的に英語で話すよう心がけたことの成果ともいえよう。またアメリカへ行く前に過半数の学生が、話すことに力を入れて事前勉強したこととも考慮入れられよう。(資料2-4)

今回の英語力テストでは、話す力について実施しなかったので、学生の自己評価通りに、話す力が実際に向上したかどうかはわからない。しかしホームステイ前よりも自信が持てるようになったことは、英語学習上、大きな励みになることと思われる。

### 3) 読む力・書く力

読む力と書く力については、アメリカに行く前には過半数の学生が多少なりとも自信があったとしている(資料2-1)。アメリカ滞在中にも半数以上の人々が、これらの分野について困難を感じている(資料2-6)。しかし帰国後、これらの力が伸びたと思った人は他の力に比べると少なく、伸びなかったとした人は約4割である(資料2-8)。テストの結果においても、語法・作文、読解力においては、他の分野ほどの向上はみられず、読解力にいたっては低下している。アメリカに行く前の事前学習にも、他の英語力ほど力を入れなかったようである(資料2-2)。

読む力と書く力がそれほど伸びなかったのは、アメリカでの授業において、読む・書くの活動が他の分野の活動に比べて少なかったということや、日本での事前学習の力の入れ方にも関係すると思われる。



#### 4) 語彙力

アメリカに行く前に語彙力に自信がなかった学生は6割以上であり(資料2-1), アメリカ滞在中には、全員困難を感じている(資料2-6)。しかし帰国後は7割以上の学生が語彙力が伸びたと判断している(資料2-8)。事前学習に力を入れた人も半数以上である(資料2-2)。ただしテストでは語彙力について実施していないので、果たして力が伸びたかどうかはわからない。

アンケート調査の結果からみると、ホームステイに参加した学生の多くは、アメリカに行く前には自分の英語力に自信がなく、アメリカに行ってからも最初は自信が持てなかったが、日常生活に慣れるに従って少しずつ自信が持てるようになり、帰国後には、ホームステイに参加したことによって自分の英語力が向上した、と判断していることがわかる。事実、帰国後の英語力テストの結果は、総合点において、参加したグループの上昇は参加しなかったグループよりも大きく、参加しなかったグループを上回る傾向にあった。

#### B: 英語学習意欲について

資料2-9より、過半数の学生が、アメリカから帰って、行く前に比べて英語の勉強をよくするようになったと回答しており、ホームステイに参加したことによって、英語学習意欲が高まったと考えられる。アンケートの最終項目として、帰国後、英語学習態度や意欲に変化があったと思うことを自由に書いてもらったが、これをみても、学生の英会話や英語圏の文化に対する興味が増し、またアメリカへ行きたいので英語の勉強をしているとか、短大の授業を熱心に受けるようになった、卒業後も英語に関わっていききたいといったように、学習態度が積極的になっていることがわかった。事実、来年度本学専攻科(英語英文科)あるいは四年制大学英文科に進学した今年度の英語英文科卒業生7名のうち、5名が英語研修旅行に参加した学生であることを参考までに付記しておく。

## 7. 結 論

今回の英語テストおよびアンケートの結果では、次のことが明らかになった。1) ホームステイに参加した学生の英語力は、参加しなかった学生に比べて向上している。特に聴解力と会話表現の知識において、他の分野に比べて向上が大きい。2) テストで実施された英語分野に関して、参加した学生が英語力が向上したと判断している分野においては、テスト結果でも向上がみられる。3) ホームステイに参加した学生の英語学習意欲が高まっている。

テストの得点からみると、HSGに飛躍的な伸びがあったとは必ずしもいえないが、N-HSGと比較するとHSGの英語力が向上しているのは確かであろう。ホームステイの英語力への効果はあったとみてよいと思われる。ただし分野によって違いがあり、聴解力、会話表現の知識においては、ホームステイの効果があったと考えられるが、語法・文法力と読解力については、その効果は期待できなかったようである。

今回の調査結果では、英語力の向上のみならず、ホームステイ参加者の英語学習意欲の向上にも注目したい。ホームステイ体験によって参加者個々に起こっているこのような意識の変化との関係から、英語力の変化を検討することが必要であると思われる。

## 8. おわりに

序文にも述べたように本稿は、今後何年かにわたって行う研究プロジェクトのパイロットスタディであるが、今回の調査結果からいくつかの問題点や反省点が指摘される。まずテスト内容の検討である。今回のテストでは話す力、語彙力について実施しなかったため、これらの分野を取り入れたテストバッテリーの再構築が必要と思われる。

また、ホームステイ参加者に対するアンケート調査の結果と英語力の変化との関係については、本稿では詳しく論ずることができなかった。参加者個人について、この関係を調べていく予定である。また、英語学習意欲や態度以外に、参加者が受けているさまざまな意識の変化と英語力の変化との関係も調べていきたいと思っている。今後の課題として、その報告は次の機会にゆずりたい。そしてこれらの研究成果をもとに、英語研修旅行参加者への効果的事前指導の方法を考えていきたい。

## Notes

- 1) ホームステイ旅行の英語力への効果については、(1) 樋口・菊地 (1982)、(2) 渡辺 (1979)、および(3) 松宮・相馬・嶺蔭 (1988) の報告がある。英語力の測定については、(1) においては“The Standard English Repetition Test” (Day, et al., 1974) を採用しているが、(2)、(3) においては英語力テストは実施せず、英語力の向上度についてのアンケート調査の結果をまとめるにとどまっている。(1) では英語力の進歩はあまりみられなかったとしているが、(2)、(3) では聴解力の上達が見られると報告している。
- 2) 渡辺嘉子, “中・高生のホームステイの成果,” 「英語教育」6月号 (1979), P.11.

## 参 考 文 献

- Cervantes, Raoul, Francis Noji and Mamoru Mukai. *Developing Listening Comprehension*. 東京: 英潮社新社, 1986.
- Ebihara, Hiroshi and Fumio Miyahara. *English Listening Practice*. 東京: 南雲堂, 1983.
- 樋口勝也, 菊池章夫. “青年期の異文化体験 (一)” 「青年心理」35号 pp.157-172. 東京: 金子書房, 1982.
- 松宮つね, 対馬ユキ子, 嶺蔭裕子. “短大生の海外研修における意識の実態について” 金沢女子短期大学紀要「学業」Vol. 30, 1988.
- 渡辺嘉子. “中・高生のホームステイの成果” 「英語教育」6月号 pp. 8-13, 東京: 開隆堂, 1979.
- 日本英語教育協会編「英検2級出題分析と対策」1983.
- 日本英語教育協会編「英検3級出題分析と対策」1983.
- 日本国際連合協会編「国連英検C級問題集・1987年版」東京: 講談社, 1987.
- 日本国際連合協会編「国連英検B級問題集・1987年版」東京: 講談社, 1987.

資 料 1

表1 英語力テスト分野別正答率と t 検定結果(1)

(数値は%)

分野	項目数		第1回 7月		第2回 9月		[9月-7月]の差		[HSG-N.HSG]の差	
			HSG N=32	N-HSG N=110	HSG N=32	N-HSG N=110	HSG N=32	N-HSG N=110	7月	9月
聴 解 力	26	Mean	50.23	50.96	57.35	52.27	7.12(*)	1.31	-0.73	5.08
		SD	13.49	16.70	14.88	18.62				
会 話 表 現 の 知 識	20	Mean	38.15	36.15	44.20	40.75	6.05(*)	4.60*	2.00	3.45
		SD	12.55	14.39	15.37	13.04				
語 法 作 文 力	20	Mean	38.45	37.25	42.95	37.75	4.50	0.50	1.20	5.20
		SD	16.42	19.34	16.29	19.39				
語 法 文 法 力	20	Mean	37.37	36.50	36.40	37.55	-0.97	1.05	0.87	-1.15
		SD	13.98	13.51	11.94	14.89				
読 解 力	20	Mean	46.70	44.50	45.45	40.20	-1.25	-4.30(*)	2.20	5.25
		SD	18.23	19.66	20.52	18.76				
Total	106	Mean	42.63	41.63	45.96	42.30	3.33	0.67	1.00	3.66(*)
		SD	8.23	11.60	9.84	12.38				

(\*)...P<0.10 \*...P<0.05 \*\*...P<0.01

表2 英語力テスト分野別正答率と t 検定結果(2)

(数値は%)

分野	項目数		第1回 7月		第2回 9月		[9月-7月]の差		[NSG-N.HSG]の差	
			HSG N=32	N-HSG N=110	HSG N=32	N-HSG N=110	HSG N=32	N-HSG N=110	7月	9月
聴 解 力	A 21	Mean	52.5	53.7	57.9	53.8	5.4	0.1	-1.2	4.1
		SD	14.6	17.9	14.4	18.6				
B 5	Mean	40.6	39.2	55.0	45.8	14.4*	6.6(*)	1.4	9.2(*)	
	SD	28.1	26.6	22.9	27.9					
会 話 表 現 の 知 識	C 10	Mean	30.9	29.1	37.5	34.2	6.6	5.1*	1.8	3.3
		SD	17.6	17.9	19.5	17.1				
D 5	Mean	55.0	56.2	66.2	65.0	11.2(*)	8.8**	-1.2	1.2	
	SD	25.5	26.4	27.1	21.9					
E 5	Mean	35.6	30.2	35.6	29.8	0.0	-0.4	5.4	5.8	
	SD	28.2	25.7	25.4	27.9					
語 法 作 文 力	F 10	Mean	33.8	32.6	38.4	34.4	4.6	1.8	1.2	4.0
		SD	22.2	23.8	23.2	22.8				
G 5	Mean	75.0	69.0	76.2	67.0	1.2	-2.0	6.0	9.2*	
	SD	21.2	25.2	15.4	25.9					
H 5	Mean	11.2	15.0	18.8	15.2	7.6	0.2	-3.8	3.6	
	SD	19.3	19.1	20.6	19.6					
語 法 文 法 力	i 5	Mean	33.8	27.2	30.6	27.2	-3.2	0.0	6.6	3.4
		SD	20.3	19.8	20.6	21.9				
J 6	Mean	41.7	42.3	38.5	42.2	-3.2	-0.1	-0.6	-3.7	
	SD	20.0	21.2	18.4	7.4					
K 4	Mean	30.5	30.3	32.0	31.3	1.5	1.0	0.2	0.7	
	SD	26.3	25.5	14.0	23.2					
L 5	Mean	41.2	43.8	43.2	47.2	2.0	3.4	-2.6	-4.0	
	SD	29.1	27.4	30.5	27.5					
読 解 力	M 10	Mean	44.1	36.8	42.8	35.7	-1.3	-1.1	7.3	7.1(*)
		SD	22.3	22.0	19.9	22.8				
N 10	Mean	49.4	52.2	48.1	44.6	-1.3	-7.6*	-2.8	3.5	
	SD	24.6	26.9	27.8	26.8					

(\*)...P<0.10 \*...P<0.05 \*\*...P<0.01

表3 JACET 英語聴解力標準テスト平均点と t 検定結果

	N		第1回(5月)	第2回(11月)	[11月-5月の差]
H S G	32	Mean	8.25	21.00	12.75*
		SD	25.14	18.37	28.26
N-HSG	108	Mean	5.89	11.00	5.11(*)
		SD	21.84	19.33	22.84
ALL	140	Mean	6.43	13.29	6.86
		SD	22.66	19.57	24.40
[HSG-N-HSG]の差		Mean	2.36	10.00**	

(\*)... $p < 0.10$  \*... $p < 0.05$  \*\*... $p < 0.01$

## 資 料 2

アメリカ研修旅行参加者に対する英語力および英語学習に関するアンケート調査 (抜粋)

- ・対象：昭和63年アメリカ研修旅行参加者32名
- ・実施：平成元年2月

1. アメリカに行く前の自分の英語力に対してどう思っていましたか。

	自信があった	自信があまりなかった	自信は全くなかった
聞く力	18	10	4
話す力	5	15	12
読む力	22	8	2
書く力	17	14	1
語い力	11	12	9

2. アメリカへ行く前に、短大の授業またはその予習・復習以外に、英語をどの分野に、どの程度、力を入れて勉強しましたか。(複数回答)

	とても力を入れた	かなり力を入れた	多少力を入れた	あまり力を入れなかった	全くしなかった
聞く力	1	6	11	11	3
話す力	1	11	10	7	3
読む力	0	2	11	15	4
書く力	0	0	9	20	3
語い力	1	3	10	14	4

3. アメリカに行って、自分の英語力に自信を持ちましたか。

- 1) 滞在中、常に自信が持てた。..... 0
- 2) 始めのうちは自信がなかったが、だんだん自信が持てるようになった。..... 22
- 3) 始めのうちは自信があったが、だんだん自信がなくなってきた。..... 1
- 4) 滞在中ずっと自信が持てなかった。..... 9

4. 上問2で、2)あるいは3)と回答した人のみ答えて下さい。

2の回答者——自信が持てなかった英語力の分野は何ですか。また、だんだん自信が持てるようになった分野は何ですか。

ホームステイの英語力への効果 (I)

3の回答者—始め自信のあった分野は何ですか。また、だんだん自信がなくなった分野は何ですか。

	聞く力	話す力	読む力	書く力	語い力
自信がなかったもの	9	22	2	4	6
自信が持てるようになったもの	14	13	2	0	1
自信があったもの		1			
自信がなくなったもの		1			

5. ホストファミリーと英語で話すようにしましたか。

- 1) 積極的に話した。……………24
- 2) 話しかけられた時のみ話した。……………6
- 3) できるだけ話すことを避けていた。……………1

6. アメリカ滞在中、困難を感じた英語の分野は何ですか。(複数回答) また、その度合いを答えて下さい。

	非常に困った	かなり困った	多少困った	あまり困らなかった	全く困らなかった
聞く力	4	10	10	6	2
話す力	6	20	4	2	0
読む力	0	8	8	15	1
書く力	0	8	11	12	1
語い力	6	14	12	0	0

7. 帰国後の自分の英語力についてどう思いますか。

- 1) 非常に力がついたと思う。……………1
- 2) かなりついたと思う。……………7
- 3) 多少ついたと思う。……………20
- 4) 行く前と変わらないと思う。……………4

8. 上問7で、1, 2あるいは3と回答した人のみ答えてください。

英語のどの分野がどのくらい伸びたと思いますか。(複数回答)

	非常に伸びた	かなり伸びた	多少伸びた	あまり伸びなかった	全く伸びなかった
聞く力	3	15	10	0	0
話す力	1	9	14	4	0
読む力	1	3	13	9	2
書く力	0	4	11	12	1
語い力	0	5	16	6	1

9. アメリカから帰って、行く前に比べて英語の勉強をよくするようになったと思いますか。

- 1) とてもするようになった。……………2
- 2) かなりするようになった。……………3
- 3) 多少するようになった。……………14
- 4) 変わらない。……………13
- 5) 行く前よりもしなくなった。……………0